

第64回岩手芸術祭戯曲大会 日本劇作家協会東北支部 岩手県演劇協会連携企画

シンポジウム「震災後の演劇・東北からの発信」

パネリスト 畑澤聖悟（青森） 加賀屋淳之介（秋田） こむろこうじ（岩手） 生田恵
（宮城） 池田はじめ（山形） 大信ペリカン（福島）

司会 くらもちひろゆき（岩手）

2011年11月6日（日）

盛岡劇場タウンホール

○くらもちひろゆき氏 おはようございます。雨の中、まだ雨降っていますが、ようこそおいでくださいました。シンポジウム、「震災後の演劇・東北からの発信」ということで、これから12時くらいまでいろいろとお話をしていきたいと思います。

きょう司会を務めさせていただきます盛岡で架空の劇団をやっておりますくらもちです。よろしくお祈りします。

3月11日の震災を境に、震災直後は中止になった演劇公演とか、あるいは延期になった演劇公演とかたくさんありまして、直接的なそういう中止や延期だけではなく、震災が与えた影響、演劇の作品づくりにどのような影を落としているのか、あるいは変わるものがあるのか、それとも変わらないのかというようなことをこれからいろいろ探っていければなというふうに思っています。

まずは、それぞれ自己紹介がてら3.11、震災のときに何をして、どこにいたのかというようなことを聞くことから始めたいと思います。

では、畑澤さんのほうから、よろしくお祈りします。

○畑澤聖悟氏 青森で渡辺源四郎商店という劇団をやっております畑澤と申します。よろしくお祈りします。

3.11のときには、僕は職場におりました。職場、こう見えて高校の教員をしておりますので、学校にいて生徒を避難させて、とにかく信号が全部とまっていて電気もつかない状態なのですが、その日、実は僕は金沢に行かなければならなくて、ワークショップがあったものですから、要するに青森空港には行ったのですけれども、青森空港も電気がついていないと。飛行機が飛ばないということになって、足どめを食って、そこからうちに帰ったという感じでした。

当時、僕は書かなければならない台本が2本あって、同時進行で進んでいたのですが、ちょっと全く書けなくなった。物理的に電気がないので、書けないということもあるのですが、1本は津軽のカミサマという民間シャーマンのちっちゃい村のちっちゃい話で、1本は死刑にまつわる話で、つまり殺人の被害者が加害者に直接手を下すことができる、あだ討ちみたいなそういう架空の制度を扱った芝居だったので、そんな細々した、そんな悲劇とか不条理とか、こんなちっちゃいことをやっていると、もうよみみたいな無力感に襲われたというか、それでもうそれ以降、1週間か10日くらいは手がとまってしまったというようなことがありました。

あとはおいおい。

○くらもちひろゆき氏 では、こむろさん、お願いします。

○こむろこうじ氏 久慈に在住しておりますこむろと申します。久慈の市民劇場を今やっております。

3.11の日は、私も仕事していましたが、久慈の合同庁舎と、久慈市で一番高い建物の6階が職場ですので、津波も見ました。水平線が波立って来るのを見たのですが、それ以上に怖かったのが県の出先機関なので停電しない仕掛けというか、そこは停電しないことになっているので、テレビを見ていたのですが、どんどん私陸前高田、釜石、山田と住んで久慈に来たのですが、釜石の映像とかがリアルで、いつも通っていた道、高架橋の下のすぐそばのあたりまでがあつと、あれ、ここ釜石だよなというような、そういう映像を見て、あれ、来るぞ、来るぞ、来るぞと言っているうちに久慈湾の水平線のところが波立って、ばあつと来たのを見て、リアルに、写真撮ろうという気も起きなくて、これは撮ってはいけないのかなというような、そういうところもありました。幸い久慈市は、沿岸部の工場とか船、漁業施設はかなり被害があったのですが、町場のところまでは浸水逃れまして、川まで1メートルというところでとまったので、大きなアンバーホールも無事で済みまし、そういうところでした。

怖かったのは、1波が去った後に、ちょっとうちの様子見に行こうと思って自転車、こゝろ職場から行ったのです。そうしたら、上に自衛隊のヘリがあつて、ババババ、ババババと来たのです。もしかしてこれは2波が来て、波のところと一緒に自衛隊のヘリが来ているのかなと思って、怖い、怖い、怖いと思ってペダルこいでいったのですが、実際来ていなくてもそのような恐怖感があったのですが、南のほうの陸前高田とか、波がそこまで迫っているというようなのを見ながら実際波にのまれた、一緒に芝居をつくった劇団員とか

もいますので、その無念さをこれから芝居でどうにか、彼らの分もやっていかなければと
いうのが今の思いでございます。

以上です。

○くらもちひろゆき氏 ありがとうございます。

では、加賀屋さん。

○加賀屋淳之介氏 皆さん、おはようございます。私は、秋田市で演劇をやっております。
劇団プロデュースチームウィルパワーという劇団を率いております加賀屋淳之介と申しま
す。

3月11日、私は普段は普通の会社勤めをしておりまして、その日もちょうど時間的に客
先に営業車両でずっと回っている時間だったのですけれども、秋田市というのは県の中心
ではあるのですが、日本海側の海ですから、結構風が強かったりするのです。ちょうど1
週間ぐらい前だったかに、ちょっとした地震があつて、次にこういう大きな地震が来ると
全く思っていなかったのですけれども、客先に行こうとして、ちょうど大きな雄物川とい
う秋田市には秋田で一番大きい川があるのですが、その脇の道路を歩いていたら、もう
電線が揺れているのです。風も強いし、車も揺さぶられるくらいの感じだったので、わあ、
これはすごい、風だなと思っていた程度だったのです。ふっと前を見ると目の前にとまっ
ている車が動かないのです。あれ、何でだろうなと思ったら何か信号が消えています。
どうしたのだろう、停電かな、風強いから電線が切れたのかなぐらいで、それでお客さん
のほうに行ったら客先の社員さんが全員ヘルメットをかぶって玄関前に出てきている。こ
の間も地震があつたから、てっきり避難訓練かなと思ったんです。「避難訓練ですか？」と
聞いたら、一斉にそこにいる人がぎろっと私のほうをにらんで、「あなた、今の地震わから
なかつたんですか」と言われて、車に乗っていたんで全然わからなかつたのです。会社
に帰ろうと思ったらもう道々全部信号が消えていて、会社に行ったらもう仕事にならないか
ら、これで解散しましょうと。解散しましょうといってももう帰りの車というか、もう帰
宅しようとする車で渋滞になっていたという、そんな感じでした。

そのときは、そのくらいの感じだったのですけれども、秋田は非常にほかの県に比べて
被害が本当に少なかったです。何があつたのかというくらい非常に静かで、停電で大変だ
つたくらいのお話でございました。ですから、その中で、秋田は何かこの震災に対して何が
できるのだろうと自分の中でもかなり悩んだこともありましたけれども、何となくここ
まで秋田は来てしまったかなという感じで、非常にほかの県の方、東北の5県の方々に申

しわけないなという気持ちで、私自身はいっぱいあります。この続きは、また後の話で。よろしく願いいたします。

○くらもちひろゆき氏 では、生田さん、お願いします。

○生田恵氏 仙台市で三角フラスコという劇団をやっております生田恵といいます。

私は、地震のときは、アルバイト先にいました。ショッピングセンターの中のテナントの一つで働いていて、お店はビルの4階にありました。地下鉄の泉中央駅という一番北側の駅のところにある建物なのですが、ちょうど3月11日がオープンの日で、その前にお店の立ち上げ準備があつて3月の頭ぐらいから働いていました。「耐震構造のビルなので大丈夫」ということは研修のときに言われていたのですが、そのせいもあつてか余計に揺れるのは揺れるのだったみたいです。建物が壊れないように揺れるということなんでしょうけど、お客さんもびっくりしていてもだれも騒ぐ人はいないで、とりあえずみんなもうしゃがみ込むみたい。そのうちに、揺れ始めてからしばらくして、どおんという突き上げるような揺れがきました。そのときに、今まで陳列してきた商品が一斉にがしゃあんと床に散らかりまして、もう什器も倒れてきそうになって、店内の照明は落ちてくるわで…というような状況でした。オープン当日だったというのもあつて、東京からもスタッフが応援に来ていたのですが、そのスタッフさんなんか割と冷静に外に通じるドアをあけて、「ああ、(外壁が)崩れてる。崩れてる。」と言っていて、ええっとかと思ったりして。お客様をみんな避難させてから、じゃスタッフも逃げますというふうに館のほうから言われたのですが、不思議なことに、そのときまだ自分たちが逃げていいと思わなかったのです。お客様をとりあえず避難させることができたらしい。さて、次にどうするのかなというかんじで、自分たちが避難するという頭がなかったのです。大きな余震(震度5クラスの)がずっと続いていて、揺れ続けていました。どこかでスプリンクラーが破損したみたいで、「カンコン、カンコン。火事です。火災が発生しました」ってアナウンス流れていて、それがものすごく怖かったです。なんというか、不気味でした。その後、スタッフ全員、目の前の駐車場に避難して集められたのですが、「状況がよくわかりませんので、解散です」と言われて、ええっみたいになって、そのまま私は歩いて帰宅したという、大体そんなところです。

○くらもちひろゆき氏 では、池田さん。

○池田はじめ氏 山形のほうでお芝居をやっていますエッグプロジェクトの池田といいます。もともと山形の日本海側の庄内、遊佐町の出身だったので、そっちのほうで芝居とか

活動をやっていたのですが、去年から山形市民会館というところに縁があって、市民会館のほうで働いています。当日もその市民会館で仕事をしていました。大ホールのほうは、その日は使用のない日だったのですけれども、劇場で地震になってどうなるかという、反響板とか吊りものがあるのですけれども、それがすれた音が、ゴオン、ゴオンという不気味な音がして、それから見るとプロセニウムが、天井のほうで波打っているのです。ものすごく怖かったです。壊れるのではないかというような気がして。

あとは、市民会館の場合はいろんな会議室もあって使っている人もいたのですけれども、その方たちもちょっと高齢の方がたまたま使っていたので、余り崩れるほどは揺れていなかったもので、まず机の下に隠れて、ちょっと、隠れてというか身を潜めて、まず身を守ってということをやっていました。当然すぐ停電になってしまったものですから、30分くらいですか、市民会館の非常電源がもったのは30分くらいなので、その後は真っ暗な状態にだんだんってというところに夜10時くらいまでいて、それから交代で一晩じゅういる人は一晩じゅういるみたいなことをやっていました。

その日、山形のほうも全部停電になったので、それから電話もちょっと一部通じなかったりして、知り合いが東松島にいたもので何回も電話したけれども、通じなくて、そのうちに携帯電話の電源が切れてしまって公衆電話で電話をしていたのですけれども、それでも通じなくて、僕は10時になって帰っていいと言われたので、帰っていこうとしたのですけれども、ちょっとすごく気になって、また公衆電話に向かって行って、車で走らせて東松島の友達に連絡とろうと思っていたのです。当然ですけれども、交差点全部消えていまして、交差点のところ、気持ちも急いでいたものだから、走っていて、その日に車と衝突しまして、二次災害なのですけれども、そのままもう車は大破で、もう下手するとそのときに二次災害で交通事故で死んでいるという状態になるような、何か僕自身も思ったのですけれども、本当に自分の想像を超えたものを見てしまっていて、その後地震の映像とかをまた見るのですけれども、今考えると何か普通にちょっとしばらく物を考えることとか、見るができないような状態だったような気がします。いろんなことが起きているのに、全然情報も入ってこないというのもちょっと怖かったですし、何をしたらいいかわからない状態でその日一日なり暮らしていたような気がします。その後で、それを知ったときに自分が何をすればいいのかというのは、ちょっと本当にわからないような感じの状態でした。

○くらもちひろゆき氏 では、大信さん。

○大信ペリカン氏 福島県の福島市で満塁鳥王一座という劇団をやっています大信ペリカンと申します。よろしくお願いします。

今福島市から来たと言ったのですけれども、3月のときは、私は福島の南相馬市という海沿いの、ニュースで聞いたことがあるかもしれないのですけれども、そのところにいました。仕事の関係で、5年ほど南相馬市にいたのですけれども、そこで当日は私仕事をサボってまして、あの地震のときは。相馬にいたのです。相馬で午前中の仕事が終わって、サボっていたわけではないのですけれども、休憩をしていて海の見えるところで松川浦といういい景勝地があるので、そこでたばこ吸って休んでいたのです。そうしたら、そこで地震に遭遇して、ずっと車に乗っていたのですけれども、揺れて、車調子悪いなと思っていたら携帯の緊急地震速報が鳴って、今でこそ携帯の緊急地震速報、よく聞きますけれども、そのときは余り聞きなれなかったもので、サボっているのがばれたと思って、すみませんとかと思ったらそれは地震で、そのとき初めて地震に気づいて、すごい揺れだったのでしばらく様子を見ていたのですけれども、なにぶん海沿いの駐車場みたいところだったので、液状化現象が起きて、地割れが起きて、水がだあっとなって、慌ててその場から逃げてきたというような経験をしました。幸いそういうこともあったので、慌てて逃げたので、津波が来る前に山沿いのほうに行くことができたので、津波を見たりとかはしなかったのですけれども、そういうことがあって、翌日部屋の片づけとかをしているときに原発が水素爆発をして、夕方ぐらいにニュースで聞いて、ちょっと慌てて福島のほうに家族で逃げて、しばらく、3月いっぱいぐらいは福島のほうにいて、また4月からは南相馬に行って2カ月ぐらい過ごしまして、その後福島に今度は転勤で移ってきたというような形で、実際に津波の被害に遭ったところとか、あと福島は福島でいろんな問題ありますけれども、そういうところをちょっとうろろしたという経験をしました。

そのような経験の中で、ちょうどうちで震災の前から企画があって、6月に東京でフェスティバルに出るという企画があったので、そこで1つ震災をテーマにした芝居をつくったというところです。とりあえずそんなところです。

○くらもちひろゆき氏 ありがとうございます。

ちなみに、私もそのときの状況を言いますと、きのう劇作家協会の東北支部の総会をちょっと開かせていただいたのですけれども、その下準備として東北各地の劇作家協会の会員に会いに行こうというふうに私は思いまして、3月11日は仙台に車を置いて、仙台から常磐線でいわきを目指していた途中でした。原ノ町というところを過ぎたあたりで、福島

原発のちょっと北側になりますか。

○大信ペリカン氏　そうです。

○くらもちひろゆき氏　福島原発のちょっと北側のあたりで常磐線に乗っているときに脱線したかのような揺れがあって、ダダダダッと、何だ、脱線したかと思ったら、ふと見ると、向かいの家の屋根がわらがガラガラ、ガラガラと落ちていて、ああ、これ地震なんだと思って、それから電車が急停車して、そしてうんともすんとも言わない。結局電車の運転手とか車掌とか、その辺の指令との連絡もつかないというような状況で、これは海近いですかと。それで、思いついて、携帯のワンセグで福島に合わせたら映ったんです。それで見えていたらしばらくたってから釜石に津波が来て、いつも岩手県でテレビを見ていると津波警報とか出ても来たんだか来ないんだかわからないような状況にしかならないにもかかわらず、もう市場のあたりに水が来ていて、えっ、これは大変なことになっているんじゃないかと思って、それから慌てて自宅に電話したりして、なかなか通じなかったんですけれども、一回だけ通じまして、大信さんとも一回だけ電話通じたんですよ。

○大信ペリカン氏　たしかメールで。

○くらもちひろゆき氏　メールだったっけか。

○大信ペリカン氏　ええ。

○くらもちひろゆき氏　メールで通じて、そのとき一緒に会おうとしていた、きのうワークショップをやってくださったいしいさんとも一回だけ連絡がとれて、「どうですかそっちは」と、「いや、道路がガタガタになって、怖いよ」というような話で、「いや、きょうの会合は無理ですね」というような話はしたんですけれども、そのような状況で常磐線の中で被災したというような感じでした。

それぞれの3.11の状況というのは大体わかってきたんですけれども、これから震災後の演劇を考えていく上で、まず今8カ月経とうとしている。チラシに実は「9カ月が経とうとする」と書いてあるのですが、あれは誤植でございまして、誰も気がつかなかったんですが、「9カ月が経とうとする」と書いておいて、よく考えてみたら、あっ、まだ8カ月だというようなことがありまして、8カ月が経とうとする今までの震災後、実際自分の演劇に影響があったこと、あるいは作品に影響があったことみたいなことをまたお話いただければと思いますが。順番で。

○畑澤聖悟氏　とりあえず地域で劇団をやっている演劇人としては、いろんな側面があって、演劇人としてどうか、劇作家としてどうかという面は分けて考えなければいけないと

思うのだけれども、演劇人としてはどうかというと、とりえず4月の中旬に公演があるというのに3月中は稽古はできないぞと。というのは、青森は、車がないと生きていけないところなので、ガソリンが買えない。劇団員は、弘前とか、いろんな遠いところから青森に集まってきているので、ぶっちゃけ集まることができないぞということで2週間稽古をやめましょうと。では、公演ができるのかとなったときに、いやとてもそんな気になれないという劇団員はやっぱりいるのです。しかも、殺人事件の被害者家族が死刑囚に直接手を下すという重く、どおんとした作品を今この時期にやっていいものかどうかというようなディスカッションを何回もしたのですけれども、でもおれたち、じゃガソリン買えなくて、カップラーメンも買えなくて、だけれども、でもおれたち被災していないよねという話をして、では予定どおりやれるのだったらやろうよみたいなことをみんなで話をして、とりえず予定は全部予定どおりにやるということにしました。

あと劇作家としてどうかというと、これはもう世の中が劇的に変わってしまったとしか言いようがなく、さっき言った、つまりこんなちまちました悲劇や不条理を書いてもしようがないという、こんなものすごくマッスな不条理や悲劇があふれているときに家庭がどうしたとか、差別がどうしたとか、憎しみがどうしたみたいなことをやってもしようがないだろうみたいなことというのはありました。

あとは、震災の8日後に高校演劇の全国大会の春の大会というのが、いわゆる春フェスと呼ばれる大会が北海道の伊達であったのです。震災の8日後ということで、これも実は全国の事務局で開催は無理なのではないかというふうに危ぶまれていて、実際にここに来ている東北代表の福岡高校あるいは被災した関東代表、あるいは遠隔地の四国代表と九州代表が出場を辞退ということになって、ツイッターにはこんな大変な時期に高校演劇の全国大会なんて何でやるのだみたいなツイートが結構あって、当時はまだ自粛ムード真っ盛りだったので、同じ時期に高校野球の選抜大会があったので、世間の矛先が高校演劇に向かなかったのですけれども、あれはもし選抜が中止になっていたらすべての矛先は高校演劇に向いたであろうということを考えると、もう胸をなでおろしているのですが、そのときに中国代表の、1本目が米子高校の「ペスト」という作品であって、「ペスト」はカミュの「ペスト」、1940年代のヨーロッパでペストが大流行したという話をやっているのですけれども、この物語、僕は以前見ていたのですけれども、全く違うように見える。それは、なぜかといったら、これはやっぱり福島原発の話に見えるのです。100年前のヨーロッパ人がペストが流行して大変なことになっているというのが福島の話にどうしても見え

てしまって、あっと思ったのですけれども、これはもう今まで見ていた作品とかというのはこれからは違う意味に必ずバイアスがかかると。すべての日本人は、多分これを、いろんなことを、いろんな表現を震災と結びつけずには見られないだろうということをそのとき思いました。

そのときに、では劇作家が何をするのか。特に青森のような被災地でないところに住んでいる劇作家で、なおかつまるっきり関係ないと言い切るには余りにも近いところに住んでいる劇作家の人は何をすればいいのかというのは、実はまだ結論が出ていないのですけれども、とりあえず自分が今思っているのはもう悲劇を書くのはやめよう。それから、人が悲しんだりとか、人が死んだりとか、憎しみとか人間の暗部みたいなのをえぐり出す芝居はもうやめよう。できるだけそれは見た後に、僕はその結論を芝居の中で出すのが余り好きではなくて、何かものすごくどおんと暗いものを持ち帰ってもらって、うちで考えてもらったほうが上等な表現だと僕は思っていたのですけれども、できるだけそうではなくて、明るいわかりやすいものをぼおんとお客さんに投げるといふうにしなければいかぬのではないかなということを今考えて、これもまた結論が出ていなくて、多分来年には違うことを考えているかもしれないのだけれども、何か今ほとにかく東北に住んでいる物づくりというのはそういう宿命を負ってしまったのではないかなという気がとてもしています。

○くらもちひろゆき氏 では、こむろさんも。

○こむろこうじ氏 私は、釜石の市民劇場をやっていたときは、災害を中心に、題材にした芝居を主に書いていまして、釜石の艦砲射撃とか、あとはもちろん津波を題材にした芝居もやっています。そのときに、私がよく言っているのは、文化の力で人の命を救うことができること。釜石で津波の芝居をしたときに、この舞台を見た人がやっぱり、まず逃げなければと思って、舞台のイメージを思って逃げることによって人命を救う。この今回の芝居で命を救うことはできるということを考えてつくろうという話をしていまして、5年前なのですが、それはいかに残っていたかなというところもありながらそれを今久慈に来て火災関係の災害ものを書いたりしていたのですが、津波関係とか、そういうのもこれから起こり得るから、それを予防するために、まず舞台でということをやってきたのが震災後、その方向をもうできない状態になったので、ちょっと方向転換が必要になってきました。

というのは、例えばことしの市民劇場、去年終わったときに来年は海女の国ということ

で、久慈の海女さんを中心にした物語で、それで津波を絡めたものをやりますということ
を去年の12月、公演終わったときに話をしたのですが、いやこれはできぬだろうと。もう
終わってしまったこと、あってしまったことなので、次の段階にシフトしていかなければ
ならないなという。ただ、だからといってリアルに描写することによって、すごく被災し
た人たちにとっては心を痛めてしまうこともある。それから逃げてはいけないけれど、
だからといって全然震災のことを考えないでおちゃらけてやってしまうのも、それも違う
なというところがありまして、今度の11月27日、「水族館狂詩曲」というタイトルで脚本書
いて上演するのですが、被災した久慈のもぐらんぴあ、水族館がもう流されたのだけれど
も、町なかの空き店舗を使って何にもないところから再生してオープンするまでの物語を
書くと。やっぱりやりながらドタバタしながら、変なことも、いろんな支援の人が来たり
して、こんなことおかしいよなというようなことがいっぱいあったので、そういうのを盛
り込みながら、震災からは逃げないながらも、やっぱり現場の人に欲しいのは、今芝居見
ておもしろかった。ちょっと元気になったから、あしたもやれるぞというような力を芝居
で与えていくというようなものをつくっていく必要があるのではないかな。その方向で間
違いないのではないかなと思いつつ今芝居づくりをしています。

以上です。

○くらしひろゆき氏 ありがとうございます。

では、加賀屋さん。

○加賀屋淳之介氏 私は、自分の作品の中で代表作という作品になるのは、その中で「ク
エーク クリップ クリック」という、舌をかみそうなタイトル、お芝居なのですけれど
も、それが一つあります。これは、阪神・淡路大震災を題材にとった作品でございまして、
その当時、今とまた別の仕事をしていたのですけれども、そのときに非常に阪神・淡路大
震災があつて物流が滞ったりとかするくらい、まさにもう関西の話ですから、こちらのほ
うとしては何が揺れたかというぐらいにしかわからなくて、ただ映像で見るすごい、もう
阪神高速が横倒しになっていたりとか、それからもう長田地区がぼうぼうに燃えてしまっ
て大変な状況になっているという空撮映像でヘリコプターの音と同時に、騒然とした音が
ばあっと流れてくるという、そういうような映像で、本当にもうテレビのフレームに区切
られた世界の話、そんな感じでしかとらえることができなかつた感じだったので。とこ
ろが、だんだん、だんだん年経るに従って、やはりこの震災の出来事というのは関西から
遠く離れた東北に住んでいる私たちだからこそこういうのを忘れないで伝えていかなけれ

ばならないという義務もどこかにあるのではないか。それは、関西と東北だからとかというのではなくて、同じ陸続きの日本の国土に住んでいる同じ日本人としてこの出来事というのは後世に伝えていかなければならないのではないかなという思いが実は少しずつ芽生えてきておりました。そのきは、もう既に私も二十数年演劇をやっていますので、戯曲を書くという気持ちも少し芽生えていました。ちょうど井上ひさしさんの「父と暮らせば」という作品がありまして、それでいわゆる、これはもうもちろん戦争というか、いわゆる原爆でもって父と子のきずなが絶たれるという、そういう非常に悲しい物語ではあるのですけれども、その先の希望がちょっところ最後に書かれていて、そういう幕切れという形になるのですけれども、こういった作品が自分の中で書けないかというのと、そういう阪神・淡路大震災を絡めたような、そういった作品が書けないかと思って5年前にこういう作品を書き上げました。そのときは、関西方面の女性と、それから秋田に住む男性がインターネットでつながり、そこにいわゆるバーチャルで、擬似的な人間関係と言われるその関係と、それから実際に震災で自分の父と別れてしまうみたいな、そういった濃厚な人間関係を絡めて書いた作品だったのですけれども、それをおととしてしたか、再演をしようということで決めまして書き直して、今度は関西方面ではなくてうんと近くにつなげて宮城に住んでいる女性と、そして秋田に住んでいる男性、これは仕事の関係で女性は建築士、それから男性は住宅会社に勤めている社員、その関係で、そういう関係の2人のやりとりの作品にして、もともとの「クエーク クリップ クリック」という話をベースにして、ちゃんとそれは踏襲した形で書いていったのですけれども、それを上演して、宮城、仙台でも上演しましたし、秋田でも上演しました。仙台というのは、秋田よりも演劇を見てただけの人口がきつと多いはずだなんて上演したわけですが、なかなかやはり何で宮城でこういう地震の話をするというような話が結構ありまして、そのときに同じようなことです。同じ陸続きの、地続きのところで行った出来事として、あるいはこれは何か伝えていかなければならないのではないかというのがまず1つ。それから、いつ自分たちにそういう災害が降りかかってくるかわからない。いつこういう悲劇的な別れが起こるかもしれない。そのことについて、ちょっと考える、考えていただきたいな。考えることも必要なのではないかなと思ったので、あえて宮城でやることにしました、仙台でやることにしましたという話をして、そうですかということでも理解をしていただいたことがありました。まさかこんなことになるとはというふうに思って、見に来てくれたお客さんの中でもお父様が津波で亡くなったという方がいらっしゃいました。そのことを考えて、あのときにや

ってよかったのかな。でも、1年後に上演ということではなくてよかったなというような気も実はしています。

ちょっと話は長くなってしまうのですが、今年5月に短いコメディをやることにしておりました。そして、準備を進めていたのですが、やっぱり震災で公共機関があらかた使うことができなくなってしまうと、それで練習ができなく、会場自体は民間の施設をお借りして、民間の施設、ちょっとしたギャラリーをお借りして上演していたのですが、そのときに会館、公共施設を使えないので練習できません。あとは、先ほど畑澤先生が言われたとおり、ガソリンがないので、稽古に集まることがみんなできないと。車を動かすことができない。ちょっと稽古を休ませてくださいというようなメールが来たりしたのですが、でも何となく文面からいってガソリンがないだけではないなというのはすぐわかりました。精神的に結構ダメージを受けているのだな。その後、会ったときに、そのメンバーの顔はもう全然、能面のような顔をしていました。「どうしたの」と言っても「いや、何でもありません」と言うのですが、はっきり言って何でもなく顔をしているのです。でも、しょうがないなど。こういうことは、先ほどもお話ししましたが、秋田では本当に災害のさの字もないぐらいの感じでしたから、とにかく頑張りましょうよ。「クエーク クリップ クリック」みたいなことをやっておりますから、やはりこういう状況において演劇というのは何か元気な力を持っているのではないかと、元気にしてあげられる力を持っているのではないかとということを声高にはったりをかましてみんなを奮起させて、何とか話を続けていったのですが、稽古進むにつれて一つの台詞に引っかかった人がいたのです。この作品は、いわゆる美術を志す若い青年と、それからすごいもう前衛美術作家で有名な人、それからそのこのギャラリーを運営している人と、それからそこを取材しに来ている取材記者という4名が出るお話なのですが、その若い芸術家志望の青年が何をつくるにももう行き詰まってしまって、全然もう物がつくれなくなってきて迷いに迷って、それで秋田にちょっと一時戻ってきて自分の原点をとり直すみたいなシーンがあるのです。その中で、偉大な芸術家が、韓国から来た芸術家という話になっていて、その人が手紙に古い考えをぶち破って、昔からの既成概念をぶっ壊していくことで新しいものが生まれるのだ。今まであったものを壊して、そこから新しいものが発想されるのだという1行の台詞があったのです。そこに引っかかったメンバーがいたのです。ものを壊して、今まであったものを全部壊して、そこから立ち上がるという、これってどうなのだろう。今これで、被災地がもう津波で全部いろんなものが流されている

中で、そこで新しいものが立ち上がると、今この段で言ってしまいますかと言われたのです。この台本って、実はもう3年も前に書いていた台本だったので、そんなことは全く意識しないで、ただそれをずっとやっていこうとしか、再演しようとして考えていなかったのですけれども、その一言が突っ込まれて、その突っ込んだメンバーが先ほど能面のような顔になっていたという、そういうメンバーなのですけれども、その人はとにかく敏感になっていました。いまだにやはり稽古をしていて、その人の気持ちというのはなかなか1枚薄皮を張ったような、そんな感じなのかなという。とにかく言葉です。そのとき意識していなかった言葉というのが途端に何か意味を持つてくるという、先ほどの「ペスト」の話ではないですけれども、そういったことは本当に身近にありまして、これは物を書くということに対して、何かちょっと自分自身が臆病にならなければいいなということとはにかく感じました。

ちょっと長くなりましたけれども、以上です。

○くらもちひろゆき氏 ありがとうございます。

では、生田さん。

○生田恵氏 震災後ということだと、試演会に参加した作品を含めて3作品上演しています。C. T. T. という、もともとは京都が発祥の組織ですけれども、30分ぐらいの短い作品をいくつか公募して試演会をして、終演後に観客とディスカッションする、ということをしている人たちがいます。その仙台の支部が数年前に立ち上がったばかりなのですが、ちょうど4月の下旬から5月の頭にかけて、公演を行う予定だったようなのです。それに参加をしませんかというふうなお声がかかりまして、「ええっ、今の時期、本当にやるの」と言ったのですけれども、C. T. T. はC. T. T. で全国にある事務局からぜひ今仙台で予定どおりやってくれと応援をいただいているので、僕たちも何かやりたいのですというふうなことを言われまして、本当にまだ直後だったので、どうなるかわからないなと思いつつも、稽古だけはしてみようということで、クリエイションを再開するきっかけになりました。といっても普段使っている稽古場なんか当然あいていないので、個人で借りているようなスタジオなどを間借りしていたのですが、今自分にとって稽古場はどうやら嫌ではないみたいだということから始まって、そのときは全く台詞は一言も書かず、役者さんと稽古の中で短いシーンをつくって構成していったものを4/30と5/1に上演しました。やるほうも見るほうもまだ本当にぐらぐらしていた時期なので、ほとんどリハビリみたいな感じでした。そういうことをしながら、創作というものについて全く考えられ

なくなっていた状況から一歩ずつ、少しずつ回復していったような経緯があります。やらせていただいてよかったなというふうに今は思っています。

次に、8月に一人芝居のフェスティバルに参加しました。これは震災前から参加することが決まっていたのですが、ちょうどその稽古が始まるか始まらないかというところに震災が起きて、2カ月ほどストップしていました。その8月の一人芝居は i n → d e p e n d e n t という大阪の劇場さんが持っている看板企画のフェスティバルで、もう10年ぐらいいやっているのですけれども、今年は全国7都市ツアーをやるというので各都市に地域制作枠というのがあって、それに参加しませんかというお話をいただいていた。ツアー自体は過去にそのフェスに出た作品の中からのセレクションで回っていたので、震災後の新作は私たちだけでした。5/7から稽古を再開し同時に脚本を書き始めましたが、普段書いている脚本とかというよりはすごく断片的なものであって、詩のようなものであったかもしれないというふうに思っています。その後、10月に大阪で公演をしてきたのですが、それも2年前から計画していたもので、大阪のA級M i s s i n g L i n k という劇団との合同公演です。お互い1時間程度の作品をつくって、セットで上演するというのを大阪と仙台でやりましょうというふうな企画だったのですけれども、大阪は1年前から劇場が押さえられるので日程も決まっていたのですが、仙台公演は実はまだ行えていません。この企画については、地震があった後に、A級M i s s i n g L i n k の作演の方が仙台に会いに来てくれました。来てくれて、話をして、とにかくやりましょうというふうに言っていただきまして、それがモチベーションとなってここまでやってこれたという状況です。

なので、ここまで、自分たちの自主公演というか、震災後に企画した自主公演というものはなくて、決まっていたものや、あるいは人から声をかけていただいて、ずっととにかく助けていただきながら何とかかんとかそこに向かってやってきたというふうなのが実際の状況です。今は、A級さんとの合同公演の仙台公演を、なんとか来年の春ぐらいに実現させたいと思っています。合同公演の作品は「あと少し待って」というのですが、震災直後の3日間のことを書いた作品です。震災が起きたからって、震災のことを書かなければいけないというわけではないと思うのです。なのですけれども、目の前にそれしかなかったもので、私は避けて通ることができなかったというのが正直なところ。ただ余りにも大きすぎて、手がつけられないというか、どうしていいかわからず、それで私は震災が起きた直後から、情報が遮断されて、何が起きたのかまったくわかっていなかった当時のことを書こうと思いました。状況って何か、近くにいればいるほどわからないのです。

阪神・淡路大震災のときは、私も朝起きてテレビをつけたらもうまさに火の海になっていたという、記憶があります。周りのほうが情報はいっぱい知っているけれども、近いところにいればいるほど情報はない。地震があつて、何かすごいことになっているけれども、外部から遮断されている奇妙な空間みたいなものがあつたように思います。最初の数日間は、テレビもつかないし、ラジオは何か言っているけれども、想像がつかないし、知らない人ともよくしゃべるみたいな災害ユートピアみたいな状況がしばらく起きていたと思うのですけれども、何かそういったころの話を書きました。それが10月に大阪で初演して、今のところはそういう感じです。

○くらもちひろゆき氏 では、池田さんの今までの8カ月。

○池田はじめ氏 仕事が事業の仕事をしていたので、会館に入っていた予定のホールの使用が軒並みキャンセルになりました。物理的にできないということ、やっぱりさっき言っていた自粛のことがあつたので、それで軒並みかなりのキャンセルというか、できない状況になっていました。その中で、5月5日に山形市民会館の自主事業があつたのですけれども、それをやるかどうかでかなり協議をしなければならなくなって、こういう時期だから、それはやらないほうがいいのではないかと、やるべきではないのではないかとということ、こういう時期だからこそやったほうがいいのではないかと、やるほうにも二つのことがあつて、結果的にはチャリティーというか、チケットの売り上げを寄附するという形で、でなければもちょっとできないという、そういうことがあつたので、そういう形でやることになりました。そのとき僕は、当然企画側としてそれはすごく思ったのですが、みんなが被災地の方たちに何かしたいけれども、どういうふうにしたらいいかわからないという状態だったというふうにすごく思いました。今もやっぱりいろんな公演があると、チャリティーの公演にして売り上げの一部を、山形の市民会館でやっている公演に関してはそういう公演がすごく多いです。だから、何か力になりたいという気持ちはすごくあるし、そういうのをどういうふうにして酌み上げていくかというのが演劇人としてというよりは社会人としてというか、そういうふうにして同じ東北に住む者として何らかのことをやっていきたいという気持ちがあつて、それができるところでやっていきたいというふうに僕自身も考えています。

あと、創作のことに関して言えば、1週間前に僕は自分が構成とか演出をしているダンスの公演をしたのですけれども、それは1年半くらい前に初演をしたやつだったので、今回3.11を見てしまった、経験してしまったので、何かそこにやっぱり再生の祈りみたい

なものを込めたいというふうにごく思いました。お芝居、まだ書いていないし、それから何らかの形で自分の中でちゃんと形にしなければという気持ちがあるのですけれども、その中心になるのは、ちょっと言葉にしにくいのですが、再生に対する祈りのようなもののような気がします。さっきちょっとお話ししていましたが、基準が若干変わったのではないかと考えていて、自分の中でもそうですけれども、本当に思いもよらないことで大切な人であるとか、そういう人と別れなければならないということが現実も起こり得るのだと。だとすれば、今できることをちゃんとやるべきではないかなとすごく思って、それを何らかの形でやっぱり劇作家としては形にすべきでないかなというふうに思っています。

さっきこれをちょっと話ししていた現実が大き過ぎて、本当に現実が大き過ぎて、そのときに頭の中で考えていたことよりももうでっかいものだから、ちょっとどうしたらいいかわからない状態がしばらく続いていて、やっと今落ち着いてきたというような、僕の中の感じではそんな感じなので、これから何かそういうことをちょっとずつ積み上げて、それからそれがあらわれてくるのはまた来年とか、ちょっと後になるような感じで考えています。

前に、僕は、ねじめ正一さんという方が酒田大火の話を小説で描いているのがあって、それをちょっと舞台というか芝居にしたことがあるのですけれども、普通に暮らしている人たちの普通の感じているようなこと、そのことを形にするようなものをちょっとつくりたいなということを少し今考えています。

○くらもちひろゆき氏 では、大信さん。

○大信ペリカン氏 私は、震災前から決まっていたという、6月に東京公演をするという企画はもともと決まっていたので、それに合わせて「キル兄にゃとU子さん」という作品をつくって6月に東京でやって、9月に仙台、横浜でやってきたのですけれども、もともと決まっていたとはいえ、東京のプロデューサーがひどい人で震災の3日後ぐらいにうちに電話をかけて、「ペリカン君、できるよね」とかと言われて、そのときまでそれをやること自体をもう全然忘れていたのです。もうそれどころではなくて。でも、そんなことを言われて、何かちょっとそこに腹が立ったところもあったから、「できますよ」とかと言ってしまった。ついつい言ってしまって、あともう一つ理由があって、さっき言ったように、ちょっと死ぬかもしれなかったなど、自分で被災の体験終わった後3日後ぐらいは思っていて、そのとき何かすごく強気だったのです。何かもう生きているだけで最高だなみたい

な、おれ生き残ったなみたいな感じで何でもできるような気になっていたのですが、ではやりますとかと受けたのですけれども、その後劇団員と会ったのはもっと大分後なのですが、話をすると本当にやるのですかみたいな感じがやっぱり出てきまして、もうやめませんか。もうやっぱりみんな心が折れていて、そういうことを考える状態ではなかったのですけれども、言った手前やろうという、自分はそういう立場に立とうと思ったので、あとはそれはみんなを説得しながら、納得をしてもらいながらやっていくというのが一つの稽古の過程でした。

そもそも震災、原発事故をテーマとするかどうかというところもあって、どうせなら全然関係ない話しませんかみたいな意見もやっぱりありました。でも、そこで最終的に震災と原発事故を扱ったのは、これは誤解を招くかもしれないけれども、私自身の演劇的な好奇心がそこに触れたからということだけです。ドラマがちっぽけに見えて何も書けなくなったというのも私もやっぱりあって、そういう状況はあったのですけれども、その中で書けるとするなら震災と原発事故のことぐらいしか書く気になれなかったという状態でした。そもそも震災終わって、最初のころというのはきょうで10日がたちましたとか、きょうで1カ月がたちましたとニュースでも頻繁に言われていて、そのとき1カ月間ぐらいは私自身、音楽とかすら聞く気にはなれなかったです。だから、それを意識もしなかったのですけれども、何か音楽聞いたのはやっぱり一月ぐらいたってからだったかな。それまで何していたかという、結構ネットで震災のニュース見たり、原発の情報を見たり、怖いな怖いなとかと思っていた、そんなことばかりしていたのだけれども、結構あっという間に1カ月過ぎていたというような実感があって、そういうことをちょっと作品に込めてみたのですけれども。

あと、6月末に東京に行くというのもちょっと怖かったです。「放射能来るな」と車に書かれるのではないかなと。何なら最初から書いていこうかなと思って。だれか「来てもいいよ」と書いてくれたらそれでもいいかなと。そういうことは、実際なかったのですけれども、そういうこともあって、やっぱり福島県民、県外に出るの、ちょっとそのとき何か怖かったので、そういうこととの闘いというか、そういうこともありました。

作品をつくって思っていたのは、やっぱり何かしら物語として今の状況を整理することはできないなと思ったのです。というのは、何が何だかわからないし、震災とまた違った原発という複雑な状況がある中で何かしら未来に向けて何かを書くということはすごくできなかったです。だから、その中でも最終的には希望というか祈りみたいなものをちょっ

と込めることにはなったのですけれども、それすらも何か単純に、では再生に向けて頑張ろうとか、そういうことにはなかなかいけない。今でもちょっといけない状態はあります。

さっき生田さんの話で出てきた4月にあったC. T. T. の試演会がインターネットで中継されて、中継というか放映されていて、それを僕家で見っていたのです。

○生田恵氏 本当ですか。

○大信ペリカン氏 ええ、行けなかったのです。それを見ていたときに、最後でドボルザークの「新世界」がかかる。

○生田恵氏 はい。

○大信ペリカン氏 それを聞いて、あっと思ったのです。これ、僕らは、もう今新世界を生きているのだと思って、これはまさに新世界を生きているのだという状況の中で、その新世界で何か物語を生み出していくということは私自身まだできてはいないのですけれども、ある種それが自分で向かい合っていかなければいけないテーマなのかなとは今感じております。だから、ある意味震災、津波ということに対して、人類は今まで経験してきたのだけれども、原発事故というのはチェルノブイリはありますけれども、スリーマイルもありますけれども、日本人としては初めての状況で、この状況では劇作家が何を、物語をつくっていくのかというのを現地にいる人間として向き合っていきたいなと思っております。

僕は以上です。

○くらもちひろゆき氏 何かすごくまとまりのいい、おさまりのいい話が最後に来た感じなのですが、とりあえず震災から以降、震災直後はやっぱりどうしても情報が入ってこなかったという感じ、あの感じというのはやっぱり中心地に近ければ近いほど何も情報が無いという感じのあの奇妙な何も、空虚さというか、結局割と暇になってしまうのです、あれ。私も実は帰ってきた翌日の昼間とか、結局何もすることがないので、子供とサッカーとかしていましたので。そういうことを考える、ある種震災後の空白みたいなところから始まって、よく演劇を考えていくと、どうしても震災を意識していなかった言葉たちが意味を持ってきたりとか、あるいは基準が変わったであるとか、予防のための芝居を書いていたけれども、その手は使えなくなったとか、あるいは人間の暗部をえぐる芝居はやめて明るい話を持って帰ってもらいたいと。そして、震災そのものについては、ある種祈ることしかできないというようなところが何となく共通点として見えてきたなという気がするのです。

今ちょうど約1時間ぐらいたったところですので、ここでちょっと一たん休憩を入れまして、休憩後はある種フリートークのような形で、今これまでの話を踏まえつつこれからの演劇をどういうふうにつくっていくのか、私はどのようなスタンスでお芝居をつくるのかみたいなことをちょっとお話を深めていければなというふうに思います。

というわけで、5分ぐらいいいでしょうか。5分ぐらいちょっと休憩をとらせていただきたいと思います。

[休 憩]

〇くらもちひろゆき氏 では、後半戦を始めたいと思います。

8カ月たって、いろいろ中止になったり、その言葉の意味が変わってきた、あるいはその基準が変わったというようなところなのですけれども、これから実際芝居をつくっていくに当たって、私のことを言えば、震災後につくった芝居というのはこの間横浜に大信さんのところの劇団と一緒にいったお芝居で、まだ盛岡ではやっていないのですけれども、「リストランテ震災篇」といまして、メニューを読むお芝居があるのですが、メニューを読むお芝居の被災地編、「瓦礫と菓子パン」というタイトルで震災直後に被災地の近所で何を食べていたかというようなことをお芝居にしたのです。それは、例えば直後は乾パン、1日半ぐらいたってから乾パンが1枚だけ、半分だけ出たとかというような話から、あるいは震災直後から普通に食事をしていて、漁師町では流されなかった家々には業務用の冷凍庫があって停電してしまっているから、その冷凍庫の中のものどんどん溶けてしまうので、贅沢なものからどんどん食べていかなければいけないとあって、ある避難所では伊勢エビの味噌汁が出ていたとかというような話とか、そういうのがマスコミには全然載らないような話を伝えるに行くことには意味があるかなというふうに思って、そういうお芝居をつくって持っていったのです。震災を受けて、被災地、被災県ではあるけれども、被災地とも言えない盛岡から横浜にお芝居を持っていくときに、さて私たちは何をすべきだろうかと、どんなことを知らせに、伝えるべきだろうか。というか、そもそもお芝居をやりに行くのだけれども、全然関係ない芝居をやってもいいのですけれども、やっぱり何か伝えなければいけないなというような気になったというのは大きな違いでした。何かを伝えるに行かなければいけないというような気になったというのは、そんなことは余り考えたことはない。岩手の被災地の何か、岩手の何か物産を売りに行くぞみたいな、そういうことというのは考えたことないんですけれども、そういうことを考えるようになったというのもちょっと私にとっては新しい発見というか、こういう災害になってしまうとそういうこ

とはあるのだなみたいな感じがしたのです。そういう端的な考えもしなかったことということについて、これからお芝居をつくる上で何かヒントになるようなこととか、あるいはこういうお芝居だったらこれから書けるかもなというようなことをちょっと考えていきたいな、なんて思うのですが、ここからは指名しませんので、しゃべりたくなったらしゃべるといって発言いただきましょうか。大体順番にやっていると、どうしても時間ばかりかかって話が深まらない傾向があるので、おれに話させろということ、それで途中で突っ込んでも可にしますので、そういうことにしましょう。何かだれかしゃべることないですか。そういうことを言っていると、私ずっとしゃべってしまいますよ。司会がこんなにしゃべるシンポジウムはいけません。

はい、どうぞどうぞ。

○こむろこうじ氏 電話来たのです。「震災直後、何食っていた」と、彼から。すごく失礼なのです。

○くらもちひろゆき氏 すみません。取材させていただきました。

○こむろこうじ氏 でも、確かに自衛隊が炊き出しに来ていたところは、すごく潤っていたりして、いやきょうは焼きそばなんかが出て、あしたのメニュー何だろうなというようなところもありますし、逆に全然避難所の隣のうちとか、日本人というのはまじめなのです。「うちは被災していないから、もらいに行けない」と言って、でもうちにはもう電気も来ていないのに、細々と。そして、隣の避難していた避難所のところでは、豪勢な食事をしているとかというようなところもあったり、いや、日本人まじめだなど思いながら、そういう実態を見ながら、でも逆に盛岡からそういう話が来るとやっぱり現地、よくわかっていないのだよなど思いながら、実際行ったらという話をしたのですが、行きましたか。

○くらもちひろゆき氏 取材には実際行きました。釜石かな、実際に行ったのは。あとは、山田から避難してきた人に話を聞いて、あとは宮古の千鶏というところにいた人とかから話を聞きました。直接行ったというのものもあるし、あとはどこかで話を聞いた、来てもらったとかというものもあります。これは、このことについては、でもすぐに盛岡でちょっとやれないなというふうに思っていたのです。いつかはと思っているのですけれども、さらに被災地に近いところに持って行くのもまだ時間がかかるのかなという気はするのですけれども、でもやっぱり忘れるのです。いろんなことを忘れるので、そう言えばこんなことを書いていたということについては後になってから振り返る意味も含めて、何かの機会があればというふうに思っています。

○こむろこうじ氏 1年後過ぎると、意外とああ、ああ、ああと被災地でも。ああ、そんなので食事していたとかと受けるかなという気はしますが。

○くらもちひろゆき氏 それについては、書いていこうかなと思っているのです。

あと、ほかにこれがこれからやりたいなとかというようなことがあったらば。

あとは、ことし横浜で一緒にやった大信さんのお芝居、「キル兄にゃとU子さん」の中で、ラジオの録音が流れたのです。ラジオの録音の中に、福島市0.何マイクロシーベルトとかというのが淡々と流されていくと。今現状も……

○大信ペリカン氏 ええ、今でもテレビの、テレビがまだ福島はL字になっていて、一部なのですけれども、全部の時間ではないのですけれども、下に福島市何マイクロシーベルトとかと出て、いまだに出ています。それを芝居の効果音として使って、それを聞いていただいたのですけれども、ちょうど芝居の中で使ったのはもう本当震災の1週間後ぐらいですか。猫のえさを買いに行ったときにカーラジオから流れてきたのを携帯で撮ったのですけれども、問題にもなった健康に対する影響はありませんということをラジオも言っていたころの録音です。

○くらもちひろゆき氏 ラジオの話で大分続いてしまうのだけれども、実は翌日かな、盛岡に帰ってきたのが12日だったのですけれども、その日の夕方、夜かな、FMラジオ聞いていたら京大の今中教授が、京大原子炉研究所の人（京都大学原子炉実験所の小出裕章助教の間違い）が「もうメルトダウン起こしています」と、実ははっきり言っていたの。ええっ、そんなと、すごくこう、でも信じたくないわけです。2カ月たってからメルトダウンしてしまいましたと言われて、あれは本当だったのだとかというようなこととかがあって、でもそういうある種塗り固められたうそのシステムみたいなものが震災でよく見えたのです。これについてもやっぱりちょっと何か作品としては生かしていかなければいけないところもあるのかなという、本当かよという。メディア・リテラシーみたいなことについてもやっぱり考えざるを得なくなってきたかなというような気がするのです。そのようなことについて、高校の先生とかはどう考えるのですか。

○畑澤聖悟氏 だから、それなのよ。だから、何かやっぱり……いや、実はもう全くお恥ずかしながら青森は気楽なもので、僕は普段滅多にうちにいないのです。3日間ずっとうちにいたという経験をさせてもらって、でも、だって停電でしょう。家族4人で、嫁と娘2人と一つのこたつを囲むの。これ、すごく久しぶりと思いながら。暗いでしょう。暗いろうそくがないではないか。がさごそ、がさごそしたら、結婚式のときにあるではな

いか。アニバーサリー……こう、こんな巨大なろうそくあるの。アニバーサリーキャンドルあるの……

○くらもちひろゆき氏 そんなもの、とっておいたわけですね。

○畑澤聖悟氏 あったの。しかも途中で折れてるの。途中の折れたところから火をつけて、アニバーサリーのそれに火をつけて、とりあえず、ほらテレビはつかないでしょう。AMのラジオこう置いてつけながら、やることないから、人生ゲームやった。

○くらもちひろゆき氏 でも、ボードゲームとかゲームとかは、やっているところ多かったと思う。うちもたしかUNOやっていたような気がする。

○畑澤聖悟氏 いや、だから大変申し訳ない話なのだけれども、死にかけて人の前でこんなことを言うのは。

○大信ペリカン氏 いやいや、何か折れたろうそくにもう一度火をつけて人生ゲームやるなんて、すごく感動的……

○畑澤聖悟氏 でしょう。

○くらもちひろゆき氏 これだけで、芝居の1シーンになります。

○大信ペリカン氏 もう1シーンですよ。すごいな。

○くらもちひろゆき氏 遠景に震災があると、何か意味があるのではないかみたいな……

○畑澤聖悟氏 最近、だから震災ユートピアみたいな話もあったではないですか。何かものすごくコミュニティーというか、人の結びつきが強くなってしまおうとか、やっぱり各コミュニティーの最小単位は家族だと僕は思うので、何か不謹慎ながらそんなこともありました。

○大信ペリカン氏 もちろん福島でもやっぱりいい面としては、例えば近所の人にあいさつするとか、「大丈夫ですか」とかと、私も余りそんなふだんは自分からしないのだけれども、そういうことをしようという気になって実際やりました。その辺で、ユートピアの話……

○くらもちひろゆき氏 そろそろ生田さんも何か出るかなと思いますけれども。

○生田恵氏 そうですね。ご近所の人とか、ふだん時間帯が違うので会わないのですけれども、いろいろしゃべったりしました。道行く人たちと立ち話したり、情報交換したり。水をくみに行くのに私わかりやすくやかんを下げ、夫と2人で歩いていたら「あら、何丁目」とか、同じ町内の人に聞かれて。「いや、うち7丁目です」と言ったら、「何だべ、7丁目、まだ水出ないの。うち出たから、くんでいくかい」って言われて、給水所まで行

かずに6丁目の人のお宅で水をくませていただいたりとか、そういうようなことがありました。食料がなかなか買えない時期に、たくさん手に入るとわけあったり。そういうことがいっぱいあったのですけれども、それを過ぎて、今はまだれが何を考えているのかちょっとわからなくなってしまうところがあって、皆さんどうしているのかなとかというふうに思ったりします。

○くらもちひろゆき氏　そうですね。直後に知らない人としゃべる機会がものすごくふえました。何か声かけるという。演劇的な潮流として言うと、割と最近人間の暗部をえぐり出すとか、割とえげつない部分を真正面からというか、えげつない部分を中心にした嫌なやつしか出てこない芝居みたいなのが割と潮流として非常にふえていったというか、それがはやっている時期だったりするのです。そこで、この震災が起きて、略奪とかもないとか、小規模の略奪というか、流されたものとか壊れた店から物を持っていったとかというような話は結構あったりとか、実は重機持ってきてATMを壊して持っていったとかという話も聞かれはするのです。それ盗賊ではないかと思うのだけれども、盗賊みたいな話もあったりはするのだけれども、むしろやっぱり聞こえてくるとか目についてくるような話というのは、圧倒的な善意が目につくのです。圧倒的な善意が前にあったときに、割とえげつない些細な人間の暗部というのがどうも何かこう描きにくくはなるというような気はするのです。さっき畑澤さんも言っていたのですけれども、暗部をえぐる話はやめようというような感じの、ただでも今は震災をきっかけにある種、善意にガッと振れるのかどうかということについては、今後のお芝居の出方というのを見きわめたいなどは思うのですけれども。

○こむろこうじ氏　被災地でおもしろいのが善意の押し売りの、現場を困らせる人たちというか。送ります。置くところないです。例えば野田村で、これで体育館の床抜けました。

○くらもちひろゆき氏　水で。

○こむろこうじ氏　水で、水の重さで。結局、水で下のところが腐っているというか、水分がある状態のところのがあつと送ってこられても置くところなくて置いたので、床がこうなると、そこも修理しなければならないというか、そういうのもありますし、あとは例えば演劇とか音楽関係のところでは私たちが行ってあげます。なので、ちゃんとしたホールを用意してくださいというのは、震災で使えない。ホール使えないというのに、えっ、私たちが行ってあげるのに用意しないのですかみたいな形での言われ方というか、そういう支援の話も聞いて、ううん、ちょっと待てよと。本当に現場の人たちのことを考えてい

るのかなというところがかなりあって、これは善意だからこそ、でもこれは芝居になるなというのがいっぱいネタとしては私は今感じているところです。

○くらもちひろゆき氏 ですから、加賀屋さん、隣県というか、被害が本当に少ない。しかし、心が折れている劇団員がいたりするという状況で、これはどういうふうに作品づくりに反映させていくかとかということについては。

○加賀屋淳之介氏 だから、本当に何かアンテナをぴんと張っている人ぐらいでないと、ちょっと書けないぐらい、秋田なんかも情報が入っていきそうで入っていないのです。ですから、入っている情報は、もう悲惨な状況というか、テレビで本当にもうフレームで区切られた、ああいう映像がもうばんばん、ばんばん流されてきて、しかも秋田はこんなに何ともないのに一步県境越えた向こうで、恐らく県境を越えると岩手県の雫石あたりでもう大変なことになっているような意識になっている人もいると思うのです。

○くらもちひろゆき氏 雫石は、それほど大差ない……

○加賀屋淳之介氏 恐らくそのくらいの感覚になっていると。錯覚として起きている可能性があると思うのです。宮城でも本当にもう何か秋の宮温泉郷のあたりに行ったら、もう壊滅的みたいな。だから、そのくらいの意識で、わあ、秋田これでいいのかなと思込んでしまっている人もやっぱりいることは確かです。それとは全く真逆で、何にも、何かこう何があったのだろうぐらいに感じる人もいますから、そこで何をつくっていくというの、本当に秋田の人って、何か震災から2カ月後に公演やっていた劇団もあるくらいですから、やはり何かちょっとずれているかなという感じがします。だけれども、本当に民間で例えば支援活動だとかボランティア活動なんかやっている人たちが、いわゆる新幹線が全部もう秋田まで通じたということで、その初日、いわゆる秋田へ一番で入ってくる列車に向かって、沿道で手を振りましょうという企画をやったり……

○くらもちひろゆき氏 そんな企画があったのですか。

○加賀屋淳之介氏 そうなのです。九州新幹線が全線開通ということになったときに、そのコマーシャルか何かで……

○くらもちひろゆき氏 ありましたね。沿線ですとこう住民が手を振るといふか。

○加賀屋淳之介氏 そうなのです。ずっと手を。あれを見た人がいて、これを秋田のこまちで、おかえりなさいこまちプロジェクトという名前でやってみたらどうかというのが県庁職員さんがやったのですけれども、県庁の職員さんらしいです。そうしたら……

○畑澤聖悟氏 その二番煎じ具合が実に秋田らしい。

○加賀屋淳之介氏 そうなのです。実にそうだ……見事なくらいに二番せんじで、それでこれはすごい、これはすごいものすごくもう話題になっていたのです。秋田はもちろんだったのですけれども、だれしもテレビでもうなぜこういうことをやったのですか。すばらしいですねとかと、二番せんじの1番が全然ぼやけてしまって、いかにも自分が初めてやりましたみたいな感じで何かやっていたのですけれども、そういうようなのを一生懸命頑張っていらっしゃる方々もいますから、やはり秋田県人、頑張らないといけないなどだんだん、だんだん声が小さくなってきて。

でも、私の仕事の関係、つながりがあって、4月に釜石に行ったのですけれども、やっぱり釜石に行ってびっくりしたのは我々の救援物資みたいなのかな、トラックで行ったのですけれども、いわゆる釜石のボランティアセンターがあって、そこで受け入れする場所というのが何か決まっていて、食料は上のほうです。それから、衣類は、下のほうの搬入口へどうぞ。何かデパートみたいなところの搬入口みたいなところなのですけれども、そこしか受け入れ口がないので、路上駐車ががあと、こうあって、それで結構通行する人の歩行者とか、それから一般の通行する人の妨げに結構なりかけていたのです。そうしたら、そこで我々もその中に並んでいて、ではどんどんと搬入していきましょうとやっていたら、極端なことを言うときすごく芝居がかったようなカップルが大げんかしているのです。「あなた、何言ってるのよ」、「おれだってな、いや怒りたくて怒っているわけじゃねえんだよ」と言って、本当に何か芝居がかったことやっていて、何やっているのだろうなどと思ったら、話を聞いたら自分が歩こうとしたところに突然搬入の車が中からぼんと出てきたらしいのです。それで、あわやひかれそうになったというところで、それでその運転手が出てきて謝っていたらしいのだけれども、突然出てこられたということと、あといろんなストレスがたまっていたのでしょう。いきなりそこでその彼氏のほうが爆発してしまって、その運転手さんにつかみかからんとしていたところなのです。そこを彼女がとめて、「いや、もうこの人たち、私たち助けようと思って来ているんだよ。あなた、それに対して何でそんなことで怒れるの」みたいな話をがんがん、がんがんやっていたのです。これを目の当たりにしたときに、こういうシーンというのは芝居の中でしか見たことがないようなシーンですから、これが実際に、本当にもう人間の感情がストレートにばあんと出ているというところが、いや、この災害というのは尋常ではないのだな。人の通行人にそれぞれの人生があるわけですけれども、その人生にもうがつんとすごく大きなくさびが打ち込まれてしまったのだなという感じがしました。

あとは、被災地、避難所に行って顔を拝見すると、やはり皆さん本当にもう疲れ切った顔をしていて、ここで例えば私も何かできないかなと思って、向こうに、被災地に行つて、こちらのほうで演劇的なことで何かできることはないだろうかというのをちょっと模索してみようと思つて行つたのですけれども、全くもう皆さんの顔見たらそんな気持ちになれなくなりました。だから、秋田でできること。とにかく、まず今自分たちのいるところで淡々と今までと同じように物をつくっていくということしかできないのではないかなという感じはします。申しわけないですけれども。

○こむろこうじ氏 加賀屋さん、そのカップル、そしてどうしたのですか。

○加賀屋淳之介氏 いや、もう外から声をかけることすらできないぐらいの、もうすごく、半径5メートルぐらい立入禁止ぐらいの、そのぐらいのボリュームなのです。

○こむろこうじ氏 すると、観客として。

○加賀屋淳之介氏 そうです。観客で、一観客です。彼女なんか「いい、わかっている」とか、もう身振り手振りのオーバーアクションで話しているんです。「この人たちね、一生懸命来ているんだよ」。不謹慎ですが「はあ、すごい。うちの劇団に入ってほしいな。」なんて思ったくらいです。事実は小説より奇なりとは言いますけれども、本当に芝居が負けてしまいます。そんな現実ですよ。

○くらもちひろゆき氏 そんな感じですよ。さらに、後方というか、山形で震災で1人死亡しているのです。震災の死者数って、たしか秋田はゼロですよ。そのときに山形1、これは何で山形で死んでいるのだろうと思つたんですけれども、知っていますか。

○池田はじめ氏 何か僕の記憶では、心臓発作だったか、転んだか、高齢の方だったような印象があるのですけれども、山形自体はそんなに揺れなかったのです。それは、揺れていないのですけれども、今山形のほうでは宮城県あるいは福島県からの避難の方がものすごく多いです。僕のうち新聞とっていないので、ちょっとどこかの新聞ぱつと見たときに、何か避難の方の数が1万人を超えたという、何か山形新聞あたりに出ていたようなのを見ました。

それから、仕事で小学校の鑑賞教室の仕事で山形市の仕事をしているのですけれども、避難する児童の人数がふえて、だから当初予定したバスが足りないわけです。すると、ほとんどの学校というか、かなりの学校で結果的に中型のバスを大型バスにしなければならなくなっていました。

○くらもちひろゆき氏 なるほど、人ふえてしまったから。

○池田はじめ氏 多分、それは、だから福島である、さっき話ししていたけれども、福島の話で、給食出さなくていいという話があった。どこでつくられて、放射線がある食べ物かわからないから、それが心配だったら何か給食ではなくて自分のお弁当持ってきていいとかという。

それから、きのうちらつと言っていた話で言うとメルtdownの情報がいち早く出ていて、東京のセレブの人たちはもう避難していたとか……

○くらもちひろゆき氏 ああ、そんな話ありますね。

○池田はじめ氏 そういう話を聞くと、何か見えないところで見えない者が情報を持っていて、それで普通に暮らしている人たちは、もしかしたら全然情報がないという、僕らに見えない世界があったのなら今回の事件で露呈しているのかなという、その出ているところが九電なりだったりするような感じがすごくするのですけれども。だから、すごくそういう意味で言うと、何か大事な情報って、もしかしたら僕らの知らないところにあるのではないかなという怖さを感じました。

○くらもちひろゆき氏 ということが如実に感じられた、主に震災後の原発事故ですけれども、それについてはやっぱりこれから僕らはお芝居を書く者として、そこら辺はどういう仕組みになっているのかみたいなことは、ちょっと解きほぐして作品化していくということが一つ手としてはあるかなというふうに思ったりするのですけれども、あとは直接的な今被災地支援、被災地公演、ありがた迷惑な話とか。実際ありがた迷惑にならないように、今被災地でお芝居をちょっとやろうしている、その辺の苦労話とか、受け入れ側の苦労話とかというようなことについて、ちょっとお聞きしたいです。

○畑澤聖悟氏 こう見えて、高校の教員をしています。前にも言いましたけれども、毎朝生徒指導部で校門に立っていると、女子生徒を指導していると一般住民におたくの女子生徒がヤクザ風の男に絡まれていますと通報されたこともありました。それは置いておいて、演劇部ということを持っておりまして、いやぶっちゃけ演劇部も予定がいっぱいだったのです。部員が三十何人いて4本立て公演をキャスト2つでやるのです。まるっきりキャストを入れかえてやるという公演を2回やって、あと中学生ワークショップという、僕の劇団でやっている、これは素人の中学生を20人くらい集めて7日で芝居をつくってしまうという、公演までやると、しかも3ステやると。だから、オーディションに1日かかって2ステやるので、稽古時間は2日と半分ぐらいしかないのです。どうすればいいかという、高校生にまるっきりその芝居をやらせておくと。それ、Aチーム、Bチームつくる。15人

出る芝居だったら30人いればできます。その30人をマンツーマンで中学生に張りつける。つまり後ろで台詞をささやいたり所作をささやいたりすると、中学生はめきめき段取りを覚えていくということを毎年やっていて、それに大体うちの演劇部員は夏までぎっちりかかるのです。

それは、物を教えるということで自分がふだん学んでいる演劇ということをもう一回見詰め直すという、意識的にするというねらいがあって、これはとてもよいことだと思っ
ているのですが、それが終わってから、ではどうしようか。とりあえず一生懸命予定やりましたよと。だけれども、やっぱり何かおれたち忘れてるよねとなって、ではこんなに大変なことが起きているのに、おれたちそれに対して何にもアクションしなくていいはずはないでしょうということを部員に対して話していて、実は高校演劇は9月に地区大会があ
って、10月に県大会があって、12月に東北大会があって、それで全国大会につながって
いくというシステムがあるのですけれども、地区大会の新作を書くときにどうしようかと。
実は、もう準備していてゾンビものをやろう。ゾンビ映画って600本ぐらいあるのですけれ
ども……

○くらもちひろゆき氏 そんなにあるの。

○畑澤聖悟氏 そうそう、あるの。だから、ゾンビ映画を、ジョージ・A・ロメロの、い
わゆる「ゾンビ」という、原題がどおんと出てくるビデオを部員に見せたりとか、今回は
これだからみたいな感じで準備をしていたのですけれども、ちょっと待てよと。ゾンビで
はないよと思って、いろんな出会いがあったのですけれども、1つは、これも伊達の春フ
ェスで、話長くてすみません、伊達で見た静岡の高校の海の星高校かな、女子校の生徒が
やっている作品でもものすごく突っ込みどころ満載でどこを突っ込んだらいいかわからない
スゴク素敵な作品なのだけれども、要するに猫の話なのです。女子高生が猫で、があつと
猫がいて、何か主人公の目の見えない少年を助けてあげて目を見えるようにしてあげる話
なのです。ものすごくたわいもなく、しかもお芝居で猫を出すときに普通やらないだろ
うということを堂々とやっているのです。つまり「そうですにゃん」とか、「わかりました
にゃん」とか、語尾に全部「にゃん」がつくの。猫を擬人化するために先人がしてきた様
々な工夫を愚弄しているみたい。こんなの見たことがなくて、でもだんだん気持ちよくな
ってきたの。もう最後は、スタンディングオベーション。

○くらもちひろゆき氏 「にゃん」で。

○畑澤聖悟氏 しばらく、もう大人たちみんなやられてしまつて……

○くらしひろゆき氏 みんな「にゃん」だ。

○畑澤聖悟氏 みんな「にゃん」、飲み会で「いや、わかりましたにゃん」、「よかったですねにゃん」とか、ずっとおじさんたちにゃんにゃん、にゃんにゃん言って。だから、きっとこれは3.11前に見ていたら、そうではないでしょうで終わったと思うにゃん。

○くらしひろゆき氏 3.11が「にゃん」の意味まで変えてしまったわけですね。

○畑澤聖悟氏 だから、たわいもなく明るいものが今求められているということ、自分が実に求めているということに気づいた。

あとは、岩手県のポスターで震災の狼煙ポスターだっけ、釜石かどこかのだと思う……

○くらしひろゆき氏 釜石ポスタープロジェクトだ。たしか瓦れき背景に、言葉で……

○畑澤聖悟氏 野球の少年が「神様、野球がしたいです」。あれにやたらひっかかって、ではわかりやすいことをやろう。だれが、どなたが見てもわかる。どなたが見てもわかるのは野球だろう。難しい話ではなく、何通りにも解釈できるすばらしい練り込まれたプロットとか要らない。もうこれしかない、見た人が。途中でネタがばれてもいい。どうせ印籠を出すのでしょうかという、それでいこうと。それで、ではどうしようかと。でも、被災地を回るといっても、さっきこむろさんがおっしゃったように、実はもう腹いっぱいなのです。お客さんを集めるというものすごく大事な作業を被災者の方々は押しつけられていて、とても大変だということは知っていたので、ではできるだけ、またとりあえずリハーサルしなくていいです。照明設備要らないです。ちょっとした広さがあればいいです。音響も要りません。幕も要りません。小道具とか舞台装置も要りません。マイクロバスで行って、そのままやって帰ってきますから、やらせてくださいみたいなことをやろうと思ったのです。それで、小道具も一切使わないで野球の試合を2試合やるというものすごくとんでもない。タイトルもばかばかしいやつにしよう。「もしイタ～もし高校野球の女子マネージャーが青森の「イタコ」を呼んだら」、なんてふざけたやつにして、だけれども、でも震災とは無関係ではない。それは、つまり青森という被災地の人間が被災した方々に言えることはこれしかないけれども、ごめんなさい、おれたちこれしか言えないけれども、でも頑張ってくださいと言うのも失礼だけれども、でもこれしかおれたちできないですということ、を全力でやるというお芝居をつくりました。

ネットに呼びかけたりとかして、チラシもこっちでつくりますと。宣伝もできるだけこっちでしますと。我々マイクロバスで行くので、もしシャトル輸送みたいな、お客さんの移動も我々がしますみたいなことまで言って呼びかけました。陸前高田のある小学校さ

んのほうと話を進めていて、何か避難所のグラウンドで今仮設の住宅があって、その住宅の町内会のほうで呼んでいただけるということに実はなっていたのですが、その校長先生が、物語の話を説明したら、いや、野球の話なのだけれども、でも被災地でチームメイトを失って青森に転校した子の話ですみたいなことの説明をしたら、でもそれはちょっとよくないです。つまり子供たちにそういうお芝居を見せたくない。子供たちの中には、そういうことを忘れたい子もいるので、見たい子もいるだろうけれどもというようなお話をいただいて、わかりましたということをお断りしていただいた。それは、もうしようがないと思うのです。というようなことがあったりとか、やっぱり受け入れていただく側というのは、いろんな事情があって、なおかつできるだけ負担にならないようにといっても所詮動いていただくのは現地の人たちをお願いすることになってしまうので、これはどうしても限界があるのです。そういうもどかしさみたいなものがあるのです。

とりあえずこの間八戸で公演をして、八戸のシーガルビューホテルという体育館、実際に避難所になったところなのですからけれども、八戸市は鮫の漁港の付近が一番被災していて、そこでやらせていただいたのですけれども、だからやっぱり行って「ありがとうございました」と言うと、「頑張ってくださいね」とか言われる。頑張ってくださいねと言われるのは変だぞとか思いながら、だから今自分がやっていること、これから12月にかけて気仙沼、大船渡、釜石、久慈と回らせていただくのですけれども、これが正しいことなのかどうかというのは実際よくわからない。本当に、これはではニーズがないことを無理矢理やっていることではないのかとか、本当にこの人たちは見たいのかみたいなことを考えて、それでもでも本当に元気が出る。観客に元気を与えるということのみに特化した芝居なのです。だから、生徒たち27人が出ずっぱりで歌ったり叫んだり走り回ったりするという芝居。ほとんどノンストップ。部員たちに言っているのはおまえたち、それを見せられるのか。本当に被災した人の前で、それを見せられるのか。覚悟が足りないのではないのと生徒に言いながら、これは自分に言っているのだけれども、だからおまえたちのテクニックなんか所詮そんなものなのだから、テクニックを見せるな。おまえたち、みんなにこにこしてきらきらしていると。きらきらして、生き生きして見せればいい。その生き生きを見せればいいのだということをしつこく言って芝居をつくっています。

○くらもちひろゆき氏 やっぱりそれは、震災後ということに関係はなくないですね。元気でいようと、きらきらしていようと。

○畑澤聖悟氏 だから、それをさっき生田さんが震災にかかわらなくてもいいのではない

のという話をさせていただいて、おれもそのとおりでと思うのです。でも、こだわらなければいけないと思っているのは、やっぱりこれはおれ自身の負い目で、それは同じ東北なのに苦勞もしなくて申しわけありませんと。こんな苦勞もしなくて、家族でゲームとかやっ
ていてごめんなさいみたいな負い目がやっぱりものすごくあって、ちょっとこれをどうにかしないと何か先に進めないような気がするというのが。だから、それは、ではあんたのエゴではないのと言われたら、その通りですと言うしかないのかもしれないのだけれども、でもこれをやらないといけない。

あと、教育者みたいなことを言うと、要するに青森の高校生に被災地で公演させたい。瓦れきに埋まっている町を見せて、そこで暮らしている人たちの前でやるという覚悟を持たせたいというような気持ちはあります。

○くらもちひろゆき氏 では、現地でちょっと受け入れなどなどをやっていたこむろさんに、その辺をちょっと教えてください。

○こむろこうじ氏 まず、明るい芝居、私もう10年前からこだわって、スタートは盛岡で演劇賞をとった作品を陸前高田に持って行って、これは盛岡で一番受けたやつだよと見せたら、無理と。見なれていない子がアングラの芝居を見て、もうこれが演劇だったら無理というのを目の当たりにして、やっぱり被災、関係ない。その前の段階からなのですけれども、沿岸部とかはまず明るい、だれでもわかりやすいものを見たいという、そこから芝居をつくっていかなければなということでは私はずっとやってきたのですけれども、やっぱり今震災があったことによって、そこに皆さんが着目することによって、今必要なのはそれなのだなというのは前からあったところに戻って、見てくれているのではないかなということでは考えています。要は、自分で書かなければならない。書くことですが、福島の人とかの話も出ましたけれども、原発関係は私は絶対書かないと思います。というのは、自分にリアルがないので。結構例えば核戦争がどうのということを書かなければとか、書いている方もいっぱいいらっしゃるのですけれども、福島の話は書かないだろうなど。やっぱり海の話はリアルなので、書き続けていくとは思っています。

あと何でしたっけ。現地……

○くらもちひろゆき氏 現地で励まし公演みたいなものの苦勞話みたいなのがちょっとあれば。

○こむろこうじ氏 今演劇も欲しい状態になってきています。最初の段階は、漫談とか、まずちょっとした演奏家の活動とか、そういうところで来ていたのですが、そろそろ避難

所の人たちも今度、今では何しようかと、こう気持ちもあと2年しかいられないしという、心がうっくつしているような状態のところ、やっぱりここで、いや今こそ芝居だなと。ちょっと長い時間使うのだけれども、その時間拘束しながらも文化体験に触れるということが今必要なところではないかと感じています。ただ、やっぱり持っていくものは、解放してほしいなど。すごくそこで日々考えているのに、さらにもっと深いものを考えさせる芝居をやって、それでなくても自殺率の高い北3県、どつぼに落とすような芝居だけはぜひ避けてほしいと。私は、だからそういう深い話はやめようと心に誓って、そういう芝居は書かなくなったのですけれども、そういうのをご提供いただければ、幾らでもコーディネートさせていただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

○くらもちひろゆき氏 ある種震災後、明るく、楽しい、元気なことについては、そういう姿を見せるということにシフトしてきたというようなところが見えます。もう残り時間もあと30分ちょっとなので、最後の質疑応答を考えると、そろそろ何となく最後のまとめという感じに入りたいと思うのですけれども、全然まとまるかどうかは別として。

○畑澤聖悟氏 あとは、やっぱり演劇は、映画とか映像とかと違って、その場で体験できるというか、我がこととして考えさせる能力が映像より高いと思うのです。だから、例えば、だから原発の話というのはどんどん、どんどんこれからどうなっていくかわからない中で、例えば福島の手書き、近いところの手書きが外で、東北ではないところでいろいろなのをやっていくというようなことはものすごく大事なことで。これからますます重要になっていくのではないかと。それは、僕たち書けない。きのう総会があって、みんな懇談会もやって、いや、福島は今こういう状態になっていますとか、今ラジオの話とか、テレビがL字になっているという話、いろいろ悲惨な話、いろいろ聞いたのだけれども、おれきのう一番心に刺さったのは、ホテルに行って、雨が降っていて、ホテルの傘を借りていこうかどうかということをしているときに、おれは傘なんか要らないよということをしていたら福島のいしいみちこ先生が「えっ、だって傘差さないで放射線だよ」と言って、「ええっ、それをあんたが言うか」と言っていたら、「いや、うちはいいんだけど、福島なんかもっとだからね」みたいなことを大信さん、指さして言ったときに、これは現地の人が言うから笑える、笑えはしないけれども、これをシャレにできるということは福島……

○くらもちひろゆき氏 福島の特権だよな。

○畑澤聖悟氏 特権と、それはうらやましいとかなんとかという問題ではないのだけれど

も、でもそのすごみというか、だから何かこれを逆にこれだけ悲惨だというようなことを切々と言うよりも表現としてもものすごく強いかもしれない。

○大信ペリカン氏　そうですね。やっぱり福島県民、放射能ギャグ1個ふえていますから。そういうことは、我々しか言えないところであって、あとみちこ先生が放射能降っていますよと言ったのは、多分福島県民、言うか言わないかは別にして、やっぱり今みんな福島の方は放射線見えているのです。だから、実態としては見えないけれども、意識の中にはきょう天気いいけれども、放射線もう出ているのだろうなみたいなことは、みんな言う言わないは別にして思っているという意味で、ああ、そうなのかなと今聞きながらちょっと整理されたところがあります。

発信というところだと、そうだと思うのです。我々しかわからないようなこと、我々が今感じているようなことを外でやっていくというのはすごく、実際自分たちがやってきて、手ごたえというか、やってよかったなと思えてきたので、これはやっていきたいと思うのですが、そこから先、地元、まだうちはこれは福島ではやっていないのです。福島でやるかどうか、ちょっと今場所がなくてやれないということがあって、福島でもやりたいなとは思っているのですけれども、そのときどういう受けとめ方をされるのかというのはちょっと怖さもあるし。

○くらもちひろゆき氏　それは「キル兄にゃ」ですね。

○大信ペリカン氏　そうです。仙台ではやったのですけれども、福島ではやっていなくて、そういう意味ではやっぱり負い目というのは私にはあります。原発でもやっぱり程度があるので、家に帰られない人に比べたら私はまだいいほうだしということを見ると、そういう意味での程度はあれど、負い目はあるので、では地元でこれから何をやっていくのかというのは、私まだちょっと答えが見つけられていない段階です。

○くらもちひろゆき氏　はい。

○生田恵氏　さっきこむろさんの話で、原発にリアルがないというふうにおっしゃったのが私はちょっと気になっていて、確かに福島に住んでいる大信さんみたいに、うちのテレビはL字とかにはなっていないですけれども、宮城は今微妙な感じで、原発の話や放射能の話が何かタブーになっているような空気があるように思います。「復興」しなければいけないのであって、それを言うてはいけないみたいな空気がちょっと流れているのではないかと。福島の方はもうそれどころではなくて、本当に被害に遭った方、亡くなられた方を探しに行くことすらできなかったというふうなものすごく酷な状況があつて、心苦しいの

ですけれども、だからといって県境に線が入っているわけじゃないはずなんです。近くにいて、同じ東北にいて、リアルがないということとは違うのではないのかな。それは、距離感によって感じ方が違かったとしても福島ではこうだけれども、私たちが今こうだということもリアルではないですか。それで、区切るのは外側の人間なのだと思うのです。例えば福島が大変だねというふうに区切ってしまうのは福島以外の人なのではないかというふうに思うのです。さっき福島の方は、放射能が見えているとペリカンさん、おっしゃいましたけれども、私も日常で感じます。風が強かったりしたら、ああとかと、天気がよくても。でも普通に海産物も食べるし、米も食うのですけれども、食べながら食べることを考えてしまいます。そういうことは日常化してきていて、原発なんかはもう本当に日本じゅうで考えていかなければいけない話だと思うのです。災害は災害で、震災は震災で起きてしまいましたけれども、その復興とか今後の話というのも確かに同時にあるけれども、原発の問題というのは本当に現在進行形で、いろんな人がいろんな考えを持っていると思うのですけれども、それは福島の方だけに背負わせていい話ではないと思うのです。

あと、私大阪にこの間公演をしに行ってきたときに関西の作家が随分この震災のことを書いていたのです。原発の話も含めて。その作家の方たちと話したときに、自分に書く資格があるのかということのみなさんものすごく苦しんでおられて、でも書かざるを得なかったというふうに言っていました。それはもう自分たちがこれまでやってきた手法とか方法とかを見詰め直す作業、検証し直すような作業でもあったし、物語を書いていた人はより物語へ返っていき、どんどん作品を解体していくような方もいました。原発のことにしろ、地震、津波のことにしろ、何かしらそうやって書いていた。向き合っておられたということだと思います。阪神・淡路のとき、私は高校生で、あのころはとて、自分が経験していないことを語ってはいけないような気がしていたのですけれども、今は逆に震災を経験して、実際に揺れを体験した人もしていない人にもどんどん書いてほしいと思うし、どんどんやってほしいと思うのです。やることによって、その人たちの体験になっていくということが確実にあるので、それは距離があつたら距離があつて感じていることというのが必ずあるので、そういうふうなことを外の人にもどんどんやってほしいというふうに今は思っています。今後の演劇ということを考えてときに、だから明るい作品をとというのも当然わかりますし、一方で原発の問題や傷ついた人、町のことがあって、自分が暮らす町のことがあって。だからお芝居はすごく難しくなると思うのですけれども、そういうことも含めて考えていかなければいけないのではないかなと思います。

○こむろこうじ氏 すみません。言葉足らずであれでしたけれども……

○生田恵氏 すみません。

○こむろこうじ氏 いいえ。そして、生活者としては感じるところはあるのですが、やっぱり書き手として、私が発信するという意識のところでは原発についての知識もそんなにならないう状態で発信できるかなというところにちょっと……ですが、再来月、1月、もしかして福島に行って、またそこで感じるものがあったら、いや書く気になるかもしれないので、今の段階ではということで、すみませんが、1月は、楽しみにいわきに行きたいと思います。

○くらもちひろゆき氏 もう時間が押し迫っているんで、最後のまとめのなところに行きたいのですが、一応今大体議論がまとまってきたのは、どういう形であれ、やっぱり発信していかなければいけない。私たちは、ここの自分の住んでいる東北の各地で発信していかなければいけない。ただ、やっぱり東北から外に発信していくべき事柄であろうというようにことは明らかだと思っております。そういうことを踏まえた上で、大信さんのほうからお聞きしたいのですけれども、どのようにこれから発信していこうと考えたいとするのかということ。

○大信ペリカン氏 やっぱり福島、原発、切り離せないと思うので、そこで生田さんの話であったとおりに、書き手が_____すれば、原発というのはやっぱり全国的な問題なので、これから先戯曲だけにかかわらず、いろんな原発文学というのが生まれてくるのだと思うのです。原発映画だったり、原発演劇だったりするかもしれない。戦争文学みたいに一つのテーマとして原発を扱ったものというのは非常に出てくると思うのですけれども、そういう中でひとつ当事者性としてある権利を与えられてしまった福島県の劇作家が権利を持っているからといっていいものを書けるわけではないのですけれども、だからそこに負けないように現地にいる者として、当然原発ものも何個か書いていくことになると思うのです。興味があるから。それで、いいものというとなあれなのですけれども、何か価値のあるものを書いていけたらいいなと思っております。

以上です。

○くらもちひろゆき氏 では、池田さん。

○池田はじめ氏 僕は、前の仕事で風力発電の風車を建てる仕事をしていたのです。それは、当然震災前だったのですが、そのときに風力発電のほうも低周波の問題であるとか、景観の問題であるとか、いろんな問題が当然出てきて、住民の方たちに説明するのですけれども、そのときに僕が思っていたのはそれとはやっぱり原発というか、どちらがいいの

だみたいなことを自分の中で思っていて、僕が低周波の問題があるかもしれないけれども、そっちを進めるべきだというふうなところに立っていたので、それは仕事として1基5億円くらいするのですけれども、やっていました。そのときすごく思っていたのは、何か電力というのは原発でも最終的には僕らが使う電力の話ですよ。だから、外の問題ではなくて、それを使う僕らの問題でもあるわけです。かなり電力というのは、公的な性質を持っているものだし、それを使う僕らがこれからどういうふうにしていきたいのかということを考えなければならなくて、これは劇作家としてというよりは、だからかなりそれを使う側が考えていって、それをどうするかを考えていくべきことでもあるのかなというふうに思います。福島をやつをやっぱり目の当たりにしてしまうと、今までやっていた原発の安全性だけではなくて、低コストということも実際には全然違いますよね。もうわけのわからないお金が山ほど流れていたりするわけで、その利権構造みたいなものもあるだろうし、それから僕らがたくさん電気を使って、それを賄うために原発が必要だったりという現実ももしかしたらあったのかもしれないし、何かその生活のところからやっぱり何らか変えていく必要があるだろうというふうに、話聞いていてすごく思いました。

多分いろんな切り口があって、僕は「六ヶ所村ラブソディ」をつくった監督さんが言っていたのがすごく印象にあるのですが、賛成派も、反対派の人もいるけれども、その人は両方の意見を映画の中では全部取材に行くよというふうなことを言っていたのです。何らかのアフタートークか何かで。もしかしたらいろんな原発に関する切り口というのをたくさん発見して、たくさんあらわしていくようなことをやっぱりする必要があるのかなという部分、話を聞いて思いました。それは、だから僕が山形にいて感じられるところではない。福島に行っていて、現実にはその場所のリアリティーとか、いろんな問題はあるけれども、感じているところでつくるしかないのかなというふうに感じました。

○くらもちひろゆき氏 では、生田さん。

○生田恵氏 震災から8カ月たって、震災直後に今の状況は全然想像できなかったですし、今もまだあと半年後、1年後のことって全く想像できないですよ。本来演劇は未来というものだと思うのですけれども、それがわからない状況の中でどうしていこうかなというものは今も考え続けています。私は大きな議論が得意ではないというか、あれなのですけれども、生活に根差した話と、「復興」とか「がんばろう」以外のメッセージと、あとは先ほど畑澤さんが体験できることだというふうな、演劇というものが体験というものをさせることに優れているというお話しをされていたと思うのですけれども、そういった意味の発

信ということならこれからもいろんなところに出かけて行って、たくさんの方々と出会いたいと思います。

○くらもちひろゆき氏 では、加賀屋さん。

○加賀屋淳之介氏 本当に、もう皆さんと意見を同じくするところなのですけども、やはり私たちは、まず書くということ、劇作をするということができるので、大変こういった問題を自分たち、実体験のかのように、やはりちょっと重ね合わせて書くこともきっとできると思うのです。ですから、本当にもう対岸の火事とか、それから向こうで起こっていることとかという意識がもうちょっと物を書く人間としては踏み込んで、いろんな条件はあるにせよやはりそれは書いていかなければならない運命を、日本の作家として、東北の劇作家として運命を背負ったのかもしれないという意識はどこかで持っていかなければいけないのかなというふうに思っています。ですから、一番最初に私がお話しした、阪神・淡路大震災の話を書いたときもやはり同じような感覚で書き始めました。私は、秋田でも何かそういう絡む作品は、どこかのタイミングで書くということになるのだろうなというふうには自分では思っています。それがどのような形で作品として出てくるのかわかりませんが、これはもう諸先生方の作品を参考にしながら勉強させていただきたいなというふうに思います。

○くらもちひろゆき氏 では、こむろさん。

○こむろこうじ氏 車で沿岸部をこう走ることが多いのですが、その風景を見ながら、私も漫画好きなのですが、「AKIRA」とか「20世紀少年」とか、ああ、リアルにそのまんまだなというような景色を目の当たりにしながら、それを含めた、漫画も含めた世紀末文学も終わったなと。ここでそういうところは、もう次の段階、そういうのもありだなという世界になっているなというのを被災地を歩きながらというか、近所のところなのですが、感じています。

今後、例えば文学というか、戯曲のところではいけば震災文学というのが、例えば戦争文学みたいな形でつくっていかなければというか、出てくるものだと思います。まず、原発の関係とか津波の関係とかがあるのですが、私にできることと言えば、やっぱり実際体験した津波のところに關する文学作品というか、文学的なものを残すのが私の仕事かなと今感じています。

以上です。

○くらもちひろゆき氏 では、畑澤さん。

○畑澤聖悟氏 結局我々は東京ではなくて、地域で演劇をしているわけで、地域演劇がどうあるべきかみたいなことを考えるのですけれども、東京でやれることを青森でやってもしようがないなといつも思っていて、それは単に登場人物が津軽弁でしゃべっているということだけではないと思うのです。では、そのときにもう一つ意識しなければならないのは、例えば震災のときにどういうことだったのか、あるいはこれから福島原発とどのくらいの距離なのかということも考えていかなければ、それなりのそれぞれの距離で考えていかなければならないのだろうなということをやっぱり認識し直した。それで、何がこれから書けるのかというと、実は僕も途方に暮れていて、とりあえず今明るいものをやればいいと思っただけで、でもどうよみたいなこともあるので、わからないです。わからないけれども、全力で考えていきたいなと。だから、例えば来年の今ごろになったらこんな芝居を被災地に持って行って、被災地公演だと言ったけれども、あれは間違っていたよねと、来年の僕はそう思っているかもしれない。でも、ああ、素晴らしいことをやったなというふうに思うかもしれないし、それはわからないです。ただ、今できることを全力でやるしかないのではないかとこのことを改めて思いました。

以上です。

○くらもちひろゆき氏 私も自分でお芝居をつくる者として、当事者性ということ言えば、常磐線被災しましたので、これはやっぱり流されていても全然不思議はないなという気はしているんです。私東北だけでも、被災地ではなくて申しわけありませんみたいな気持ちは、実はほとんどなくて、全然私は流されていっておかしくはなかったんで、私も、もしかしたら死んでいても全然不思議ではないわけだから、そういう意味で言えばある種、彼岸からの目で現在の状況を描写すればいいのではないかなというような気がしているんです。ですから、今これを経験してきたようなことを描写するというようなことで、これから書いていくんだろうなというような気がしているんです、私は。というような、それで恐らくそれぞれの場所で、それぞれの立場で、それぞれの作品をやはり打ち出していくという、何とか当たり前のような話でまとめるということになりますけれども、ここあと残りちょっとありますので、質疑応答的なことをしてみようかなと思うんですけれども、大体盛岡で質疑応答をすると全然手が挙がらないということが普通なので、何か質問ありますかと、聞きたいことありますかということを知ると、大体手が挙がらないので、手が挙がらなかったらここで終了ですので、何か質問ありますかでしょうか。

○発言者 はい。

○こむろこうじ氏 ありました。

○発言者 きょう参加させてもらって、本当にすごくよかったのですが、1つ想定外という言葉が大分というか、ひょっとしたら流行語に将来なるかもしれないと思うのです。想定外ということは、やっぱり原発も大震災も両方に想定外のところがあったのかな、あったと思います。そういうところをやっぱり演劇人として、想定外をそのまま想定外で済ましてしまえばいいのかという、何かちょっと聞きながら私も疑問を感じて、ぜひこれから東北の劇作家の皆さんに想定外ということをやっぱりちょっとこう、もしよかったらテーマにしていだけばいいかと、そういう気持ちで今提案でございますけれども、発言させていただきました。

○くらもちひろゆき氏 ありがとうございます。これについて何か。想定外ということで言えば、よく話すのは自分が生きている間にこのような災害が起こるとは思わなかったと。いつかあるかもしれないけれども、このような災害が自分が生きている中に、合間に起こるとは考えもしなかったというようなのは1つ言えることなのです。そういう意味で、想定外ではあるのだけれども、いつかは起こるであろうということについては、明治三陸クラスの津波ではあったわけで、ですからそれがたまたま生きている間に起こってしまったから、生きている間にそれも考えておかなければいけないというような気はちょっとしますよね。

では、お願いします。

○発言者 岩手の者です。こむろさんにちょっとお尋ねしたいのですが、今度この「水族館狂詩曲」のチラシのところに出演者に小中学生らしい……出るのですね、子供たちが。

○こむろこうじ氏 はい。

○発言者 それで、私も大槌町役場とか陸前高田の風景、ちょっと通りすぎるだけで眺めただけなのですが、小中学生にはあの風景を、私はこういうのを見せたくないというのが本当の気持ち。

もう一つは、多分彼らはかなりダメージ、身体的に、精神的にも受けているだろうと。小中学校の子供たちです。復興、再生ということを考えた場合、何とかして身体的に前と同じような状態に、これは今すぐは無理なだけけれども、持っていきたい。そのためには、今こう言われている絆とかなんとかという言葉とかと別に、やっぱり演劇は身体の揺さぶりなので、そういうものを学校現場なんかに取り入れてもらえればうんといいのではないかなとか思っているのですが、稽古をしてみて子供たちの風景とといいますか、様子をちょっと

と聞かせてください。

○こむろこうじ氏 実は、これは3日の日に、NHK 1周年震災特別番組でドラマをつくと。子役オーディションをするということで彼女たち出たのですが、ちょっととれるかどうかわからないのですが、監督さんとの受け答えも聞いたのですが、久慈市は全然直接体験している子がほとんどいなくて、例えば山形村などで山間部なので、例えば盛岡の子たちと一緒にテレビを見ての体験、あとは親戚等で被災した人もほとんどいないですし、お父さんが出張で石巻に行ったけれども、大丈夫でしたとかというようなレベルだったので、私もそれでも大体感じていたので、これはいけるなど。実際陸前高田でやろうかとかという気持ちは起きません。彼女たちというか、その子たちに震災を題材にしたものを今やるということは想定はしていませんけれども、久慈だったらいけるかなと踏んでやっていますし、例えば心のケアのことを考えれば、家族ではない地域の人たちと一緒に物をつくると、そういうところできずなをつくるということを考えれば、市民劇場として子供も高齢者も一緒になって物をつくるというのはすごく地域の結いも含めた形でのきずなづくりにもなるのではないかなと思って進めております。回答になったでしょうか。

○くらもちひろゆき氏 ほかに何かございますでしょうか。

○大信ペリカン氏 今のことで、ちょっと自分の体験から。うちも、大人の話ですけども、原発事故のやつをやって、2回やったのです。6月と9月に。9月の稽古を始めたときに、やっぱりその当時の気持ちなんかが再生できなくなっていたのです。それは、何でかという、我々6月の芝居やってちょっといやされてしまった。きのうちよつといいいみちこ先生とも話していて、いしい先生も原発問題扱った芝居をやっていて怒りが持続できないと言うのです。それは何でかという、生徒たちが、いしい先生は高校演劇なので、いやされてしまっている。それは、非常に乱暴な方法かもしれないし、ただあと人それぞれペースがあるので、一概には言えないと思うのですけれども、演劇は恐らくそういういやしの効果もあるのではないかなということは感じます。

あと、子供の中で忘れたい方もやっぱりいると思うのですけれども、でも忘れるというのもまたある意味危険な行為というか、忘れるわけではないので、ではそれをどういうふう整理するのかというところで多分演劇というのは効果的にいけるのだろうな。さっきのワークショップの話とか、まさにそのとおりだと思いました。

以上です。

○くらもちひろゆき氏 ありがとうございます。ほかに何かありますか。

○発言者 高校演劇のほうにかかわっている岡部といいます。

高校演劇のほうだと、ことしの地区大会、県大会見てもどこの県もやはり震災後の
という言い方はよくないかもしれませんが、がメインになってきています。今度山形で東
北大会が行われるのですけれども、各県からそれぞれ震災ものが出てくるかなという感じ
はしています。6月の段階で、秋田の先生から電話があって震災について扱っていいです
かというふうに私のほうに問い合わせがあって、私は各県で感じたことをやっていただけ
ればいいのではないですかと。忘れ去られるのが一番問題なのではないですかという答え
方をしました。高校生がつくる、生徒がつくるものとか、我々がつくる方法もあるのです
けれども、私自身もそうなのですけれども、自分がいやされている部分というのがすごく
あるというのと、あと皆さんのような地域を出て都内とか、ほかの県でやるとか、関東と
かどんどん出てくる方々に期待したいのは、やはり発信してもらいたいというのを強く感
じております。影響力のある方々だと思いますので、ぜひどんどん発信して行ってほしい
なというのを要望としてお願いしたいと思います。

ちょっと宣伝だけさせていただきますと、12月に東北大会があって畑澤先生のところの
学校も出ますし、さっきちょっと話題に出てきた「にゃん」と言う芝居ですけれども、山
形の学校が再演をして出てきますし、「ペスト」も出てきますので、もしよろしければ山形
のほうに来ていただければということで、ちょっと宣伝です。それは、別の学校ですよ。ね。
春フェスで上演した学校ではなくて、ほかの山形の学校が、台本は出回っているので、ミ
ュージカルとしてそれをやってみた。「にゃん」とやっていますので、もしよろしければ。
ええ、見ると「にゃんにゃん」言いたくなります。というのがあります。ついでに、うち
の学校も出ますので、よろしく願います。

○くらもちひろゆき氏 さまざまな情報をありがとうございました。頑張りましょうね。

○畑澤聖悟氏 何だ、そのまとめ方。

○くらもちひろゆき氏 というわけで、そろそろ時間的によい感じになってまいりました
ので、この辺でシンポジウムを閉じたいと思います。長い時間ありがとうございました。